

14. 5-171



1200501211412

14.5

171

調査資料第一三五編
満洲油坊現勢(記述編) 昭和四年
満鉄調査課編



始



14.5

17.1

昭和
四年

滿洲油坊現勢(記述編)

滿鐵調查課

14.5-171

凡 例

一、本稿は曩に發表せる滿鐵調査資料一三二編「滿洲油坊現勢統計編」の主要事項の概要を説明し、之を大正十四年現在と比較して其間の變遷推移を見、之に最近に於ける業界事情、並に生産品の輸移出狀況をつけ加へて滿洲に於ける油坊の現狀を記述したものである。

二、本稿はもこ上記統計編の冒頭に掲げて一冊にする豫定であつたが、一部地方の回答遅延から統計發表の遅るゝ、約半歳に及びしたため、一部に上記統計發表を急がるゝ向あり、止むなく之を別稿としたものである。

三、執筆者 三上安美

昭和五年六月十八日

昭和四年 滿洲油坊現勢

發行所寄贈本

第一 昭和四年に於ける滿洲油坊界……………一

第二 滿洲油坊現勢概観……………五

 一、概要……………五

 二、地方分布狀況……………七

第三 地方別油坊工場現勢……………一七

 一、南滿地方……………一七

 二、北滿地方……………二〇

第四 豆粕及豆油輸移出狀況……………二三



目次

一



昭和四年 滿洲油坊現勢

第一 昭和四年に於ける滿洲油坊界

滿洲の工業を代表する油坊業は、近年化學肥料硫安の壓迫による豆粕需要の減退並に歐洲製油工業の勃興に伴ふ原料大豆の歐洲輸出激増により、豆油の輸出殆ど杜絶せるため、逐年一途不振の歩を續けて來た。而して今やその度、深刻を極め、正に一大改革を要する實情に直面してゐる。

今、この間の事情を大連、牛莊、安東及浦鹽の四港輸出趨勢から窺へば、下の如く、(二頁參照) 製品たる豆粕、豆油は共に最近、年を逐ふて激減し、就中昭和四年は豆粕一五七萬噸、五、二〇〇萬枚に減じ、一晝夜製造能力五七萬枚から云へば僅かに三割にも及ばぬ沈衰振で、恰も過ぐる大正九年の事情に逆戻りしてゐる。反之、原料大豆は大正九年の七〇萬噸から、其後逐年一途激増を續けて、昭和四年の如き實に三〇〇萬噸の巨額に達して、遂に過去に於ける最高記録を作つた。この大豆の輸出増加は勢ひ生産地原料高を呼び、さなきだに採算難の油坊業をして益々不振に導かないでは置かない。

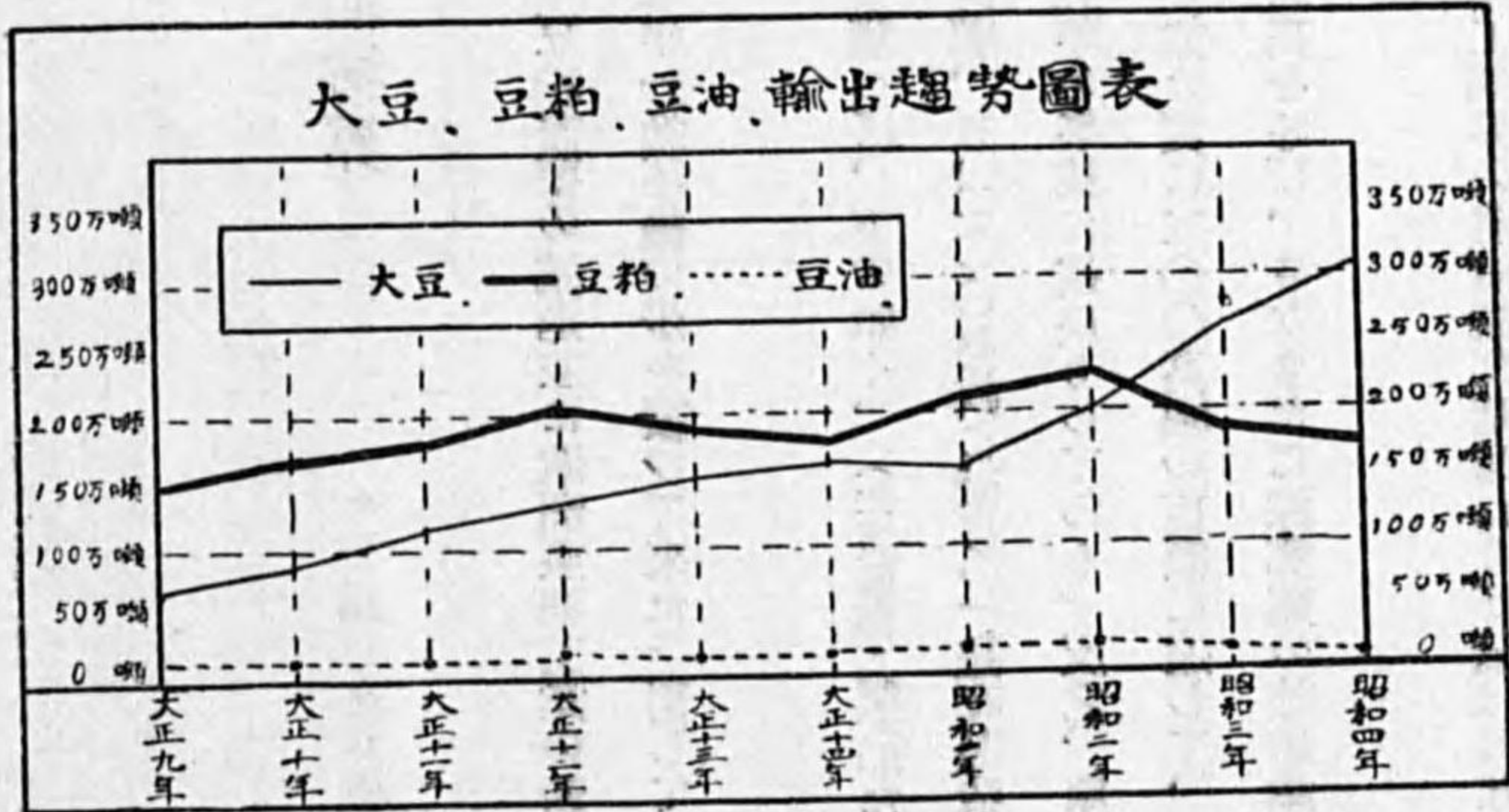
故に如上の事情にして、尙將來に及ばんか滿洲油坊工業即ち滿洲工業界の前途甚だ暗澹たりと云はねばならぬ。

滿洲大豆豆粕豆油輸出趨勢 (單位千噸)

年次	品別	大豆	豆粕	豆油
大正9年	大豆	696	1,496	139
大正10年	大豆	855	1,659	132
大正11年	大豆	1,149	1,791	132
大正12年	大豆	1,322	2,048	173
大正13年	大豆	1,510	1,880	152
大正14年	大豆	1,614	1,747	169
昭和1年	大豆	1,536	2,129	199
昭和2年	大豆	2,042	2,255	200
昭和3年	大豆	2,628	1,821	144
昭和4年	大豆	3,087	1,569	134

註、滿洲經濟統計に據る。

大豆、豆粕、豆油輸出趨勢圖表



昭和四年の油坊界が依然不振に一步を深めたことは、上表その輸出情勢によつて明に之を窺ひ得るが、彼の七月勃發せる露支兩國時局の紛争は、地方的に、而して時間的には多少の變化を生ぜしめた。即ち近來業界不況は滿洲を通じての現象は云へ、原料大豆の大産地であること、更に東支鐵道の運賃政策の好影響を受ける點で、稍々南滿に勝る好條件を有した北滿が、東支、烏鐵の連絡破れて以來、從來過半東行せし貨物が全部南行を餘儀なくされたため、原料大豆は旺に南滿に殺到、自然相場に影響し、そのために出廻りに近付いた年末近くの大連油坊界は近來になき採算圏に入り俄に活況を呈した、これに反し北滿は時局が生んだ金融難の上に更に高運賃を以て南行を餘儀なきよつて一時、地方的に若干の浮沈はあつたが、大勢は依然不振に終つた。然し業界不振の裡にも、本年は多年關係者間に於て考究されつ、あつた一二對策が研究完成せられて、業界の前途に一道の曙光を前約した。それは豫て大正十四年以來關東廳、滿鐵及當業者の一部を以て組織せる大豆工業研究會が左の二大研究を經濟、技術兩方面から完成發表したものである。

滿洲油坊現勢

年末採算	
大豆百斤ノ市價	六・四〇圓
内 麻袋代	二・二五
豆粕一枚當大豆原價	三・〇七
豆油五斤三分ノ價格	一・〇〇
差引大豆原價	二・〇七
工賃	一・一〇
豆粕一枚ノコスト	二・一七
最近豆粕市價	二・一九
差益	〇・二二

*くされたために、一時南北その地位を換へたが然し十二月末に入りて露支の時局は支那側の讓歩によつて、急轉直下、その局を結びたるため、南滿の油坊は再び元の採算難に復してしまつた。

斯く昭和四年はこの突發事件に

- (一) 理想的製油機械の發明
- (二) 現在の丸粕式油坊の改造

前者は現在の壓搾器、並に抽出式製油法より一步を進めたアルコール抽出式の研究に成功して、目下經濟的試驗中である。

後者は實驗上(イ)「編油草の使用による油草の節約」(ロ)「大豆水分の減少による出油率の増加」の二大事項の可能を實證するに至つた。即ち丸粕一枚に對し従來は油草平均二錢を要し、滿洲油坊業の年生産六、〇〇〇萬枚に對しては、實に一二〇萬圓の多額に上つてゐたが、今回の編油草を使用するに於ては既に三菱油坊の經濟検査の結果經費約半額にて足り、金額約六百萬圓を節約し得ることを確めた。

又従來大豆を壓搾するに當つては壓力の増加による以外は出油率増加の方法なしと信ぜられてゐたが、今回研究の結果、壓力は現在の丸粕工場程度でも原料大豆の含水量さへ減少せしむるに於ては、或程度迄出油率の増加を計り得るものなることを確め得た。即ち實驗の結果によれば原料大豆の水分を五%減少せしむるに於ては出油率は十三%まで増加せしめ得ることを確實となり、かくて製造された丸粕の水分は十二%見當にて、現在普通の丸粕十八%に比し、六%方水分少きため、より長期の保管に堪へられ、隨て丸粕の儘歐洲へ輸出し得るから、現在の如き粉碎、乾燥、包裝等による斤量の減少その他の諸費用等相當經費の節約をなし得る可能性を認められた。これに就ては、滿鐵が三菱油坊に依頼して試験的に春より夏にかけ獨逸ハンブルグ方面及倫敦市場に輸出したが、同乾燥丸粕の輸

出成績は極めて良好な結果を收め、到着後に於ても従來の丸粕の如く約四%の目減り等は絶體になく、微も生ぜず、需要方面に於て頗る好評を博したものの如くである。

以上の研究は製造業者並輸出業者に限り、價額の點より云ふも非常に有利な前途を開いたものにして世間の注目を引いてゐるが、更に等しく滿洲油坊不振の打開策としての豆粕の飼料化運動も本年に入りてその具體化を見、滿鐵農務課員及當業者を内地に派してその調査及各機關との連絡を計ることを得た。その歸來談によれば、従來硫酸に侵蝕された部分は今後その飼料化によつて或程度迄償ひ得るものの如くであるから、假令今回の「アルコール抽出式機械の發明」「丸粕式油坊の改造」及「豆粕の飼料化」が今後販路の開拓、設備の變革等に多くの時間と資本を要して、その面目一新には借すに相當の時間を以てしなければならぬにしても、是等の諸方策は今後の打開策と相俟つて、現今疲弊沈衰その極に在る滿洲油坊界に確に一道の光明を前約せるものである。

第二 滿洲油坊現勢概観

一、概 要

昭和四年末現在に於ける滿洲油坊現勢の概要を觀れば、工場の数四七二、その資本金、金に換算して三千四百餘萬圓(年末或年平均)各種貨幣混計六千五百數十萬圓なる。壓搾器の臺数は水壓式四、一八九、螺旋式八、五七六、楔式一四五、合計一二、九一〇臺、その一晝夜の製造能力量豆粕約五十七萬枚である。

これを大正十四年現在に比べれば、下表の如く工場數に於ては僅に五軒の増加であるが、資本金（混計）に於ては三千萬の激増振りである。然しながら、滿洲に於ける貨幣は、その數僅に數種に止まらざるのみならず、その相場は絶えず變動あり、時に往々時局の變化によつて思はざる激動を免れない。故に今これ等資本金を貨幣別に金に換算すれば、昭和四年末は大正十四年に較べて四百八十萬圓の増加云ふことになるが、然し、大正十四年調査に

年次	工場數	資本		壓搾器				一晝夜製造能力
		混計	金換算	水壓式	螺旋式	楔式	式	
昭和四年末	四三	五、四四一、〇〇〇	三、四二〇、三三四	四、八九	八、五五	一	五六、六三	
大正十四年	四三	二、五〇〇、〇〇〇	二、九八八、七五	二、四〇〇	九、六六	四	三三、四九	

註 資本金の金換算は必ずしも妥當ならざれど、各貨別に當課調査年末乃至年平均換算相場により。

は哈爾濱に於ける工場の資本を全然缺いてゐるから、當時のそれを昭和四年末現在から推算して哈大洋約四〇〇萬元と假定、之を金に換算すれば（大正十四年平均哈大洋一〇〇元につき金一二二圓）四八八萬圓となるから、昭和四年は大正十四年に比べて全然資本の増加を見ないことになる。

壓搾器に在りては總數に於て大正十四年の一三、一四六臺に比し、寧ろ二三六臺の減少を來たした。然しながら、これを種類別に見れば、大正十四年に比し、水壓式は一、四四九臺を増加し、反之螺旋式一、三九三臺、楔式二九二臺の減少を見てゐる。即ち壓搾器は能率悪しき楔式乃至螺旋式から能率大なる水壓式に進歩したのである。それは

製造能力によつて充分その間の事情を窺ひ得る。

即ち大正十四年に於ける一晝夜製造能力五三一、四七九枚に對し、昭和四年末は五六九、九二一枚であるから、壓搾器の減少にもかゝらず三八、四四三枚の能力増大である。

這回調査豆粕の生産は油坊により、地方により不明のものがあるのみならず、大連の如き混合保管入庫品のみの數字なるが故に、實際生産額よりそれだけ少い譯である。今輸出數字を實際生産高と見れば下の如く、兩者の間約五〇〇—九〇〇萬枚の差がある。即ち、それだけが不明のもの及未調査の撒粕、板粕及其他と見るこゝが出来る。

豆粕生産高（單位千枚）（輸移出高は噸を丸粕に換算せるもの）

區分	年次			
	元	二	三	四
輸移出高	七〇、二六四	七四、四二五	六〇、〇九四	五一、七六二
這回調査生産高	六五、一八〇	六五、二五八	五三、六〇二	
兩者の差	五、〇八四	九、一六七	六、四九二	

豆粕生産は之を輸移出額より見るも、將た這回調査數字より見るも、共にその趨勢は昭和二年に於て稍々増加したるも、大勢に於て漸減の傾向が窺はれる。就中昭和四年はその度が激しい。

二、地方分布狀況

滿洲の油坊工業は地方的には從來斷然大連先づその首位を占めてゐた。然し、近來は原料大豆の増産と東支鐵道の運賃政策により、哈爾濱を中心とする北滿著しく擡頭して正に大連と相對抗する情勢を招致した。

以下主要事項に就て滿洲油坊の地方的分布狀況を見よう。

工場數

規模、製造能力等を離れて單に工場數から見れば、下の如く、主要都市別には南端大連の五九軒と北端哈爾濱の四〇軒が斷然優位に在り、前者は總數の一割二分、後者は八分を占める。之に次では遼陽、安東、營口、開原及撫順方面等に多く、七分乃至四分を占めてゐる。

之を大正十四年に較べれば、同年も依然大連、哈爾濱最も優位に在り、安東、營口、遼陽、開原等之に次ぐこと敢て昭和四年に變らぬが、大連が八六軒から五九軒に激減したと及北滿が哈爾濱に於て三軒減じたりと雖、北滿合計に於て、大正十四年の六一軒から昭和四年末六八軒に寧ろ増加したことは注目し得る傾向と云はねばならぬ

油坊工場の地方分布

地方別	昭和四年末		大正十四年		地方別	昭和四年末		大正十四年	
	實數	割合	實數	割合		實數	割合	實數	割合
南	59	33	68	31	南	100	22	100	11
大連	59	33	68	31	海	2	0.5	2	0.2
子					熊	10	2.2	10	1.1
高					岳	2	0.5	2	0.2
連					城	10	2.2	10	1.1
					城	2	0.5	2	0.2

滿		北		滿		其		合	
洗	鄭	安	撫	營	長	開	鐵	奉	遼
家	屯	東	順	口	春	原	嶺	天	陽
30	30	26	27	23	23	20	20	20	23
22	22	26	24	25	23	24	22	25	27
20	22	25	27	23	28	20	20	25	20
22	23	25	24	25	22	24	22	23	24
合	北	北	哈	滿	其	奉	天	以	南
計	滿	北	爾	沿	他	安	奉	天	以
	北	滿	爾	線	吉	安	奉	天	以
	滿	沿	濱	線	長	奉	天	以	南
	線	線	線	線	線	天	以	南	北
22	24	24	24	24	24	24	24	24	24
100	68	68	68	68	68	68	68	68	68
27	28	28	28	28	28	28	28	28	28
100	49	49	49	49	49	49	49	49	49

備考 上記地方は昭和四年末一〇工場以上現存せるもの。
大正十四年刊行「滿洲油坊業の現勢調査資料」二頁工場總計四四八は四六七の誤り。

資本金

投資額より見た滿洲油坊業の地方分布狀況は、その投下貨幣が種々雑多な種類に岐れ、然も各相互間に著しき相場の變動があるから、過去の比較は勿論、一定時期に於ける總額も嚴格には計り難い。が然し、茲には必ずしも妥當ではないが、比較的便宜上假に年末乃至年平均各貨幣相場によつて金に換算合計して見れば、總額三千五百萬圓に達する。(資本金不明の工場哈爾濱に二三軒、其他北滿に一五軒計二八軒を算するが、這回調査同地方一工場

平均資本金、四萬圓より之を推定すれば、約一〇〇萬圓に及ぶ。仍て三、五〇〇萬圓は左表實際調査判明額に之を加算したるもの。

次に、之を地方別に見れば、大連斷然多く、二、〇〇〇萬圓、割合から云へば總額の六割近くに及び、之に次いで南滿地方（大連、營口、安東を除く）であるが、都市別に見れば、大連に次ぐものは資本金に於ても工場數と同じく哈爾濱で不明工場二八軒分を推定すれば、三〇〇萬圓を超える。

昭和四年末現在總投資額が大正十四年に較べて殆ど何等の増加を見てゐないことは既に述べた如くであるが、之を地方別に見れば、現在大連が大正十四年に比較して倍増したに反し、營口及南滿各地（大連、營口、安東を除く）が約半減したことは注目に値する現象と推ふ。

油坊資本金の地方分布狀況

地方別	昭和四年末		大正十四年	
	混計	金換算	混計	金換算
大連	三,586,000	10,706,500	8,676,000	9,366,600
營口	1,522,000	1,001,800	2,109,000	2,070,500
安東	2,118,000	3,333,000	2,300,000	1,000,500
哈爾濱	4,652,000	2,251,100	不明	不明
合計	11,878,000	17,292,300	13,085,000	12,438,100

地方別	昭和四年末		大正十四年	
	混計	金換算	混計	金換算
北滿沿線	1,250,000	1,330,000	1,222,000	1,200,000
南滿沿線	3,378,000	7,688,300	2,263,000	1,513,100
合計	4,628,000	9,018,300	3,485,000	2,713,100

備考 大正十四年は哈爾濱全然不明、昭和四年末も哈爾濱及北滿沿線に不明二八軒あり。その推定資本金約一〇〇萬圓、換算率は昭和四年は年末相場、大正十四年は同年平均相場に據れり。

壓搾器

昭和四年末に於ける壓搾器の總數が、水壓式四、一八九臺、螺旋式八、五七六臺、楔式一四五臺に上ることは既に概要のところで述べた如くであるが、今之を地方別に見れば下の如く、水壓式に在りては大連斷然多く、その數一、八二臺に達し、總數の四割五分を占める。之に次ぐ地方はハルビンで、八八五臺、割合にして全體の二割一分に當る。他は南滿沿線一割一分を頭に何れも全體の一割以下にある。

壓搾器の地方分布狀況

地方別	水壓式		螺旋式		楔式	
	實數	%	實數	%	實數	%
大連	1,820	81	1,100	12	1	1
營口	334	8	3,250	37	1	1

安東	ハルビン	北滿沿線	南滿沿線	合計
308	685	444	456	4,169
5	22	10	2	100
1,352	966	577	3,444	8,767
6	23	6	4	100
4	1	1	1	12
6	1	1	1	100

註 北滿沿線と云ひ、南滿沿線と云ふは上記都市を除いた地方の合計なり。

螺旋式に於ては、水壓式と趣を異にし、寧ろ南滿沿線に多く、臺數三、四四四、割合にして四割を占めてゐる、大連は之に次で一、七〇二臺、總數の二割に當り、他は安東、ハルビン、北滿沿線、管口の順位である。上記南滿沿線中に於ける主たる地方に就て見れば、開原の五〇〇臺、遼陽二五六臺、奉天二四五臺、撫順一九三臺、四平街一九二臺、鐵嶺一七四臺、魏子窩一六二臺等が多い地方であつて、何れの地方も水壓式よりも螺旋式をより多く使用してゐる。

次に楔式を使用せる地方は安東と南滿沿線に限られてゐるが、その中、南滿沿線に七割二分の一〇四臺、安東に残の二割八分、四一臺がある、然し、上記三式の中、楔式は最も少く、全體の僅に一分を占めるに過ぎない。最も多きは六割六分の螺旋式で、水壓式は三割三分に當る。

斯くの如く、現在滿洲に於て使用されてゐる壓搾器は上記三様式であるが、その中で最も多きは螺旋式である。

即ち地方的に見ても、大連の水壓式多きを例外として、他は全部螺旋式の方が多い。その中特にその差の甚しいのは安東と南滿沿線である。

次に之を大正十四年現在と比べて見れば、下表の如く、機械の臺數に於ては減少した。然しながら、その間壓搾器の趨向は楔式より、螺旋式に、螺旋式より水壓式へと變遷して來た。それは左表に見る通り、大正十四年楔式が全體の三分を占めてゐたものが、昭和四年、一分に減り、螺旋式七割六分であつたものが六割六分に減じ、反之水壓式は二割一分であつたものが、三割三分に増加したこゝによつて判る。

地方別に見ても現在楔式は、大正十四年に較べて悉く激減し、螺旋式も安東、北滿及南滿沿線を除いては著しく減つて來た。然しその代り、水壓式は全部の地方が揃つて増加してゐる。

壓搾器變遷比較

地方別	水壓式		螺旋式		楔式	
	昭和四年	大正十四年	昭和四年	大正十四年	昭和四年	大正十四年
大連	1,865	1,835	1,753	3,067	1	1
營口	334	303	366	76	1	1
安東	308	233	1,352	1,219	4	35
ハルビン	685	550	966	1,499	1	1
合計	3,190	2,921	4,427	6,309	7	48

滿洲油坊現勢

年別總數に對する%	北滿沿線		南滿沿線		合計	
	實數	%	實數	%	實數	%
三	四、一〇	100	二、〇〇	100	六、一〇	100
一	三、三	100	二、八	100	六、一	100
三	三、四	100	三、四	100	六、八	100
六	三、四	100	三、四	100	六、八	100
六	三、三	100	三、三	100	六、六	100
三	三、三	100	三、三	100	六、六	100
三	三、三	100	三、三	100	六、六	100

製造能力

全滿油坊工場の一晝夜豆粕製造能力は五六九、九二枚にして、之を地方別に見れば、大連斷然多く總能力の三割八分、之に次では南滿沿線の二割三分であるが、都市別に見れば哈爾濱、大連に次ぎ總能力の一割五分を占める。その他は安東、營口に降る。

豆粕一晝夜製造能力

地方別	豆粕製造能力		割合	
	實數	%	實數	%
大連	三、八二〇	100	三、八二〇	100
營口	一、六〇〇	100	一、六〇〇	100
安東	一、〇七六	100	一、〇七六	100
哈爾濱	一、二二五	100	一、二二五	100
合計	七、七二一	100	七、七二一	100

次に之を大正十四年現在に較べて見れば、下表の如く、總數に於ては、昭和四年は大正十四年に比し三八、四四二枚の能力増加であるが、地方別に見れば、大連は約五萬枚を減じ、他は何れの地方も増加を示す。その中でも著しき増加を見たものは北滿沿線である。

豆粕製造能力比較

地方別	昭和四年		大正十四年	
	實數	%	實數	%
大連	二、八、〇〇	100	二、三、〇〇	100
營口	一、六〇〇	100	一、六〇〇	100
安東	一、〇七六	100	一、〇七六	100
哈爾濱	一、二二五	100	一、二二五	100
合計	六、七〇一	100	六、二〇一	100

之を割合から見れば、各地方ともに一般に同能力乃至増加せるに反し、大連のみは著しき激減である。

生産高

豆粕の生産も大連に最も多く、全産額の五割前後を占め、哈爾濱之に次で二割を占める。残り三割が其他の地方で生産されることになる。

最近三箇年間の生産状況を地方別に見れば下の如く、主産地大連は近年著しく減産、不振の傾向に在り、營口は

滿洲油坊現勢

略々同一状態を繼續し、安東又多少の起伏はあるが、大勢は年毎に減産衰微の状態である。反之、哈爾濱及北滿沿線は這回調査に不明工場ありしにか、わらず、逐年著しく増産して來てゐる。素より、下表は、上にも述べた如く一部北滿に不明工場あり且つ大連の如きは撒粕、板粕、等所謂混合保管扱外を加算してゐないから正確な總生産高ではないが、地方的生産狀況の概要は之を窺ふに充分である。

豆粕生産額累年比較

別地方	昭和元年		昭和二年		昭和三年	
	實數	%	實數	%	實數	%
大連	三、二九四、〇〇〇	五	三、二九四、〇〇〇	四	三、三三三、〇〇〇	四
營口	五、三六一、〇〇〇	八	五、三三三、〇〇〇	八	五、四一三、〇〇〇	一〇
安東	五、四六六、二五〇	八	六、〇八九、〇〇〇	九	四、二四一、〇〇〇	八
ハルビン	八、八七〇、一六〇	一四	三、三三三、〇〇〇	二	一〇、二六六、〇〇〇	一三
北滿沿線	三、〇一九、〇〇〇	五	四、〇三三、〇〇〇	七	三、五〇〇、〇〇〇	七
南滿沿線	六、〇〇六、八七〇	九	七、三六六、一一〇	二	七、〇五〇、〇〇〇	三
合計	三、一〇六、二五〇	一〇〇	三、一〇六、二五〇	一〇〇	三、一〇六、二五〇	一〇〇

備考 年度は歷年なり。

第三 地方別油坊工場現勢

次に、滿洲油坊工場の現勢概要を主要事項に就て見れば、以下掲げる如くである。

一、南滿地方

(イ) 大連

大連に於ける油坊現勢 (昭和四年末現在)

工場數	敷地坪數	建物坪數	資本金	壓搾器	公稱製油能力	豆粕生産高(混保扱)			作業日數		
						昭和元年	昭和二年	昭和三年	元年	二年	三年
埠頭方面 四一(内日人七)	六、三六	三、六六	金三、六〇〇、〇〇〇 銀六、七〇〇、〇〇〇 小洋一、〇〇〇、〇〇〇	水壓一、四〇〇台 螺旋一、三六	二、二六〇 枚	二、四三三 千枚	二、〇三七 千枚	一、八三三 千枚	二七 日	一六 日	一九 日
西崗子方面 一一(全部華人)	六、五六	三、三三	金一、九〇〇、〇〇〇 銀一、〇〇〇、〇〇〇	水壓一、六六 螺旋一、三六	三、〇〇〇 枚	九、三三 千枚	六、四七 千枚	二、五〇 千枚	一八 日	一八 日	一三 日
東沙河口方面 七(全部華人)	九、三〇	二、八四	銀一、〇〇〇、〇〇〇	水壓一、三三 螺旋一、三三	二、五〇〇 枚	二、八二五 千枚	二、二五二 千枚	一、五五 千枚	二七 日	一七 日	二九 日
計五(内日人七)	七、三三	三、三三	金三、六〇〇、〇〇〇 銀九、七〇〇、〇〇〇 小洋一、〇〇〇、〇〇〇	水壓一、八六 螺旋一、三三	二、八、一〇〇 枚	三、二九 千枚	二、六六四 千枚	三、五五 千枚	一三 日	一八 日	一三 日

滿洲油坊現勢

(口) 營口

營口に於ける油坊現勢 (昭和四年末現在)

工場數	坪敷地數	坪建物數	資本金	壓搾器	一晝夜製造能力	豆粕生產高			作業日數		
						昭和元年	昭和二年	昭和三年	元年	二年	三年
三	五,七〇〇坪	一八,五〇〇坪	銀金 一,三三〇,〇〇〇 大洋 三,三三〇,〇〇〇	螺旋式水壓	三,六〇〇枚	五,三六〇千枚	五,四〇〇千枚	五,四五一千枚	一六日	一四日	一六日

(ハ) 安東

安東に於ける油坊現勢 (昭和四年末現在)

工場數	坪敷地數	坪建物數	資本金	壓搾器	一晝夜製造能力	豆粕生產高			作業日數		
						昭和元年	昭和二年	昭和三年	元年	二年	三年
云	不明軒	不明軒	銀金 三〇〇,〇〇〇 大洋 五〇〇,〇〇〇	螺旋式水壓	五,七三六枚	五,四〇六千枚	六,〇〇九千枚	四,一四四千枚	二七日	三三日	三二日

(ニ) 其他南滿諸地方

其他南滿に於ける油坊現勢

工場數	坪敷地數	坪建物數	資本金	壓搾器	一晝夜製造能力	豆粕生產高			作業日數		
						昭和元年	昭和二年	昭和三年	元年	二年	三年
長春三	四,〇〇三坪	一,三三七坪	現金 五〇〇,〇〇〇圓 哈鈔 九〇〇,〇〇〇圓 大洋 二〇〇,〇〇〇圓	螺旋式水壓	六,〇七二枚	六,八〇〇千枚	六,九二〇千枚	三二日	三〇日	二八日	
開原三	五,二四四坪	六,九七七坪	現金 二,〇〇〇,〇〇〇圓 現大洋 二,〇〇〇,〇〇〇圓	螺旋式水壓	一六,〇六六枚	一五,〇〇〇千枚	一五,〇〇〇千枚	三六日	三二日	三二日	
鐵嶺二	一八,八八三坪	二,三三〇坪	現金 五〇〇,〇〇〇圓 現大洋 二四六,〇〇〇圓	螺旋式水壓	五,八〇六枚	三〇五千枚	五二四千枚	一六日	一六日	一六日	
奉天二	七,九二二坪	三,四四〇坪	現大洋 六二,〇〇〇圓	螺旋式水壓	一三,四四五枚	九,九八千枚	七,〇〇〇千枚	二〇日	二〇日	二〇日	
遼陽三	二〇,三九七坪	七,一三三坪	奉票 六四〇,〇〇〇圓 小洋票 一五〇,〇〇〇圓 現大洋 三〇,〇〇〇圓	螺旋式水壓	六,四〇〇枚	四,四〇〇千枚	六,〇〇〇千枚	一四日	一三日	一三日	
海城二	三,七〇〇坪	三〇大洋	三,五〇,〇〇〇圓	螺旋式水壓	三,〇〇〇枚	三,三三三千枚	三,三三三千枚	二五	二〇	二〇	
熊岳城二	六〇坪	三〇金	六〇〇,〇〇〇圓	螺旋式水壓	一,四四五枚	二二	二〇	三	三	三	
皮子窩五	八,三三四坪	二,一六二坪	大洋 六六,〇〇〇圓	螺旋式水壓	四,七五五枚	一,六六	一,五	一〇	一〇	一〇	
撫順七	一五,五三三坪	四,八五五坪	現大洋 六〇,〇〇〇圓	螺旋式水壓	六,三二二枚	四〇三	六,七	六,四	一三	一三	

滿洲油坊現勢

滿其 鐵沿 線他 三	三三,五九	六,九七	官帖 六〇〇,〇〇〇 鈔票 二〇〇,〇〇〇 小洋票 一〇〇,〇〇〇 哈大洋 四〇〇,〇〇〇 奉天洋 三,〇〇〇,〇〇〇 奉天洋 三,〇〇〇,〇〇〇	水壓 三,四〇〇 螺旋式 三,四〇〇	一,八三	一,七三	二,〇六		
洮昂 洮線 昂	志,二五 洮南不明	四,八七 不明	鈔票 三〇〇,〇〇〇 大票 一,〇〇〇,〇〇〇 奉天洋 三,〇〇〇,〇〇〇	水壓 一,五五 螺旋式 二,六六	六八	七五			
吉長 線七	三,九七 不明	三,三三 不明	官帖 三〇〇,〇〇〇 哈大洋 三〇〇,〇〇〇 奉天洋 三,〇〇〇,〇〇〇	螺旋式 二,一七	六七	五九			

二、北滿地方

(イ) 哈爾濱

哈爾濱に於ける油坊現勢 (昭和四年末現在)

工場 數	數地坪數	建物坪數	公稱 資本金	壓 搾器	一晝 夜 製 造 能 力	豆 粕 生 產 高
哈爾濱 道裡一	一,三七	三,三三	五,〇〇〇	水壓 二六	一,九六〇 千枚	昭和元年 三二 千枚 昭和二年 三六 千枚 昭和三年 三七 千枚
八 區元	三〇,四〇	(不明六軒)	(不明六軒)	螺旋 五三	四,五〇〇	昭和元年 四二七〇 千枚 昭和二年 五,三四六 千枚 昭和三年 四,九六〇 千枚

舊哈 爾濱二	(不明二軒)	(不明二軒)	(不明二軒)	螺旋 三三	二,五六〇	二,五八
顧鄉 屯五	(不明六軒)	(不明二軒)	(不明二軒)	水壓 一〇	九,〇〇〇	一,三六
傅家 甸三	(不明二軒)	(不明二軒)	(不明二軒)	螺旋 一〇	二,五〇〇	一,八〇
松浦 鎮一	二,八三	不明	不明	水壓 一〇	二,五〇〇	六〇〇
合 計四	(不明四軒)	(不明四軒)	(不明三軒)	螺旋 九八	八,三二五	八,八七

(ロ) 其他北滿諸地方

北滿に於ける油坊現勢 (昭和四年末現在)

工場 數	數地坪數	建物坪數	公稱 資本金	壓 搾器	一晝 夜 製 造 能 力	豆 粕 生 產 高
滿 洲二	一,八〇	四,四〇	一〇〇,〇〇〇	水壓 六	五,四〇〇 枚	昭和元年 三三 千枚 昭和二年 七六 千枚 昭和三年 三六 千枚
安 達一〇	(不明四軒)	(不明六軒)	五〇,〇〇〇	螺旋 三	二,四〇〇	一,九七
昂 溪三	五,六〇	九〇〇	三〇,〇〇〇	螺旋 二	五,六九	四九
齊 齊哈爾二	二,〇〇	三〇〇	五〇,〇〇〇	螺旋 六	二,二五〇	一四

富拉爾基一	阿什河四	帽兒山一	一面坡三	牡丹江一	巴彥一	合計
不明(天, 五千)	不明(天, 五千)	不明	不明	不明	不明	不明(天, 五千)
1,000	不明	不明	不明	不明	不明	不明(天, 五千)
\$	不明	不明	不明	不明	不明	\$
100,000	不明	不明	不明	不明	不明	不明(天, 五千)
水壓	螺旋	螺旋	螺旋	螺旋	螺旋	螺旋
三,二〇〇	三,〇〇〇	三,〇〇〇	一,八〇〇	不明	不明	不明(天, 五千)
三〇〇	不明	不明	不明	不明	不明	不明(天, 五千)
三〇	不明	不明	不明	不明	不明	不明(天, 五千)
六	三	二	一	九	四	不明(天, 五千)
不明	四	一六	八	二	四	不明(天, 五千)

第四 豆粕及豆油の輸移出狀況

豆粕

滿洲豆粕がその輸移出品の大宗であることは、今更述べるまでもないが、今大連、牛莊、安東及浦鹽から海外に輸移出される数字を見れば、次表の如く。

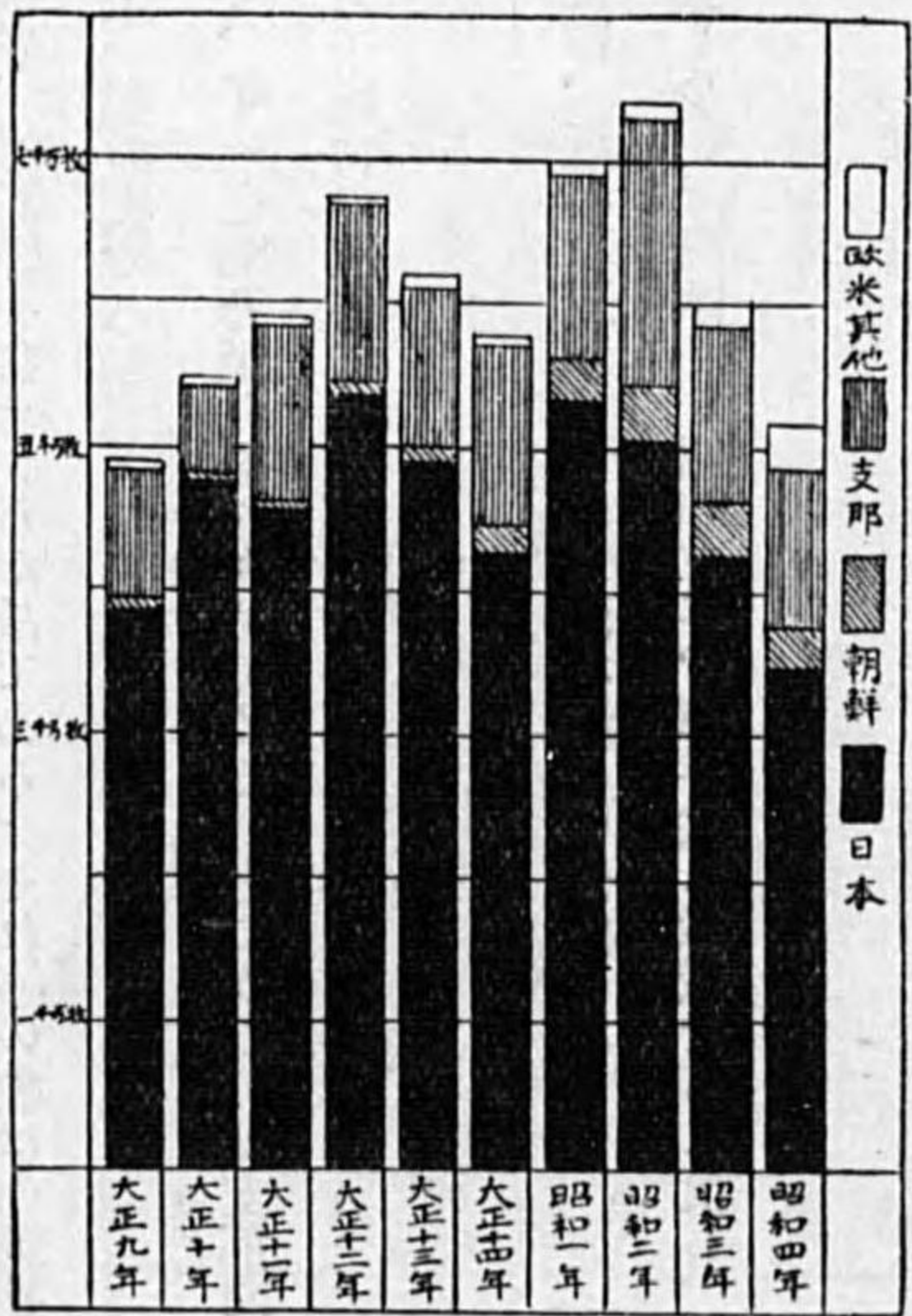
大正九年以來十箇年、年平均約六千萬枚の巨額に達する。之を趨勢から見れば、大正九年の四千九百萬枚を最少として、大正十二年の六千八百萬枚迄年々増加の一途を辿

り、その後十三、十四年を減じたが、翌昭和元年は俄に急増し、次で同二年は更に増して、七千四百萬枚を越へ、遂に大正十年以來の最高記録を見せた。然しながら、その後は年々約一千餘萬枚宛を激減して、昭和四年は五千二

滿洲豆粕輸移出累年比較(單位: 100枚)

年次	仕向先	日本	朝鮮	支那	歐米其他	合計
大正九年		三,五七五	一,〇七五	九,一五二	五,〇三三	一九,八三五
大正十年		四,五七五	五,〇〇〇	六,六九六	二,五七五	一九,八四六
大正十一年		四,〇〇〇	三,二二二	三,三三三	四,〇〇〇	一四,六五五
大正十二年		五,六六四	一,〇三三	三,四九一	四,〇〇〇	一四,二八八
大正十三年		四,〇〇〇	一,九二二	一〇,九〇一	七,五〇〇	二四,三二三
大正十四年		四,八〇〇	一,〇七五	三,三九九	四,〇〇〇	一三,二七四
昭和元年		五,三三三	二,八九三	三,三三三	四,三三三	一五,三三三
昭和二年		五,〇〇〇	三,七三三	一,九二二	七,〇〇〇	一七,六五五
昭和三年		四,三三三	三,五〇〇	一,五〇〇	一,六六六	一〇,九九九
昭和四年		三,六六六	二,八二二	一〇,三三三	三,九六六	五,七六六

備考 本表は當課刊行「滿洲經濟統計」に據り米噸を枚に換算せるもの。歐米其他は主として歐米にして其他は極めて少し。



滿洲油坊現勢

百萬枚云ふ大正十年以來の最少記録を遺して、更に將來に及ばんこしてゐる。即ち最近に於ける滿洲豆粕貿易は年々一路衰頽の趨勢にある。それは亦直ちに滿洲油坊工業の趨勢を語るものにして、前述生産狀況のそれと符を一にする。只數字に於て生産が寧ろ輸移出數量を下るのは、生産額が一部不明のものがあり、且つ大連の如き混保扱のみに限り、その採算の如何によつて動く、丸粕の粉碎及板粕、撒粕等を含まざるが故である。それ等の額は勿論採算關係によつて不同であるが、今迄の結果は大體五分乃至一割前後である。

次にその輸移出先を見れば上表の如く、日本向最も多く、年々七割乃至九割を占めてゐる。之に次ぐのは支那向で約二割、他は極めて少く、近年朝鮮向及歐米其他向が若干増加の趨勢にあるのは注目し値する。

豆 油

豆油の輸移出數量は大正九年以來年々約二億數千斤に及び、近年は豆粕と同じく漸次減少の傾向に在る。

輸移出先は歐洲を以て第一とし、支那之に次ぎ、日本最も少い。只歐洲が昭和三年、四年共に激減せるに反し、支那及日本が俄然増加を見たのは注意し値する。

滿洲豆油輸移出累年比較 (單位:1,000斤)

年次	仕向先	日本	支那	歐洲	米國	其他	合計
大正九年		二七,六七	四〇,三二	六九,七七	四,四六	一〇,一〇	一五〇,六六
大正十年		五,四八	八七,三八	六,八〇	二,七三	一,二六	一五〇,三三
大正十一年		五,九	六,二五六	二七,五七	二,七六	一,五三	一五〇,三〇
大正十二年		一,〇四	五,〇三	二七,三〇	五,〇六	一,七七	一五〇,三三
大正十三年		三三	二七,〇五	一八,一一	三,三三	五,五	一五〇,八六
大正十四年		六六	五,六四	一八,〇六	三,九四	七四	一五〇,三八
昭和元年		六九	三,六八	二四,八七	一八,九七	七九	一五〇,三〇
昭和二年		三六	四七,〇四	三八,九八	一四,九三	九三	一五〇,三六
昭和三年		九三	一〇,八九	二,三四	二,四八	一,四〇	一五〇,三六
昭和四年		二,六六	三,六三	六,五三	二,三四	一,〇一	一五〇,三六

備考 當課刊行「滿洲經濟統計」に據り、米噸を斤に換算せるもの。日本の中には朝鮮を含む。

14.5
171

P

終